慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	超人ニーチェの素顔
Sub Title	Zu ,,Übermensch" Nietzsches
Author	八木, 輝明(Yagi, Teruaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.107- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

超人ニーチェの素顔

八　木　輝　明

まえがき

ニーチェに関するこの一文を草する動機から書きはじめてみたい。

私は大学生のときからニーチェを読みはじめ，大学院でも小論文のテーマにした。その後ニーチェを研究テーマとして学問的探究をしていく気にはなれなかった。ニーチェの著作にふれるあいだに，彼の思想というよりその人柄，人間性のほうに強くひかれ共感するようになった。それにつれて学問的分析をもとに，ニーチェを大きな思想的潮流と結びつけ，かれの考えをことさら難解な言葉で，むずかしく解釈するような研究書になじめなくなった。

たとえば「永劫回帰」「超人」などというニーチェの言葉を，近寄りがたい哲学用語を駆使して大々的にまつりあげる論述に疑問をもった。ニーチェのこうした言葉は，彼が生涯病気に苦しみ，孤独のうちに病と自己を克服していく生活のなかからいわば自然に生まれてきたものだ。思想というより生活に密着している。とりわけニーチェの場合，直接その原文にあたり，前後の文脈を斟酌しつつ原点にくり返し立ちかえることがなによりも大切だ。学問的，科学的分析で細断し，あるいは断片的なニーチェの言辞をあまりにも自己流に解釈し，各人が「これがニーチェだ！」と言わんばかりに書かれたニーチェ像をいま一度修復し，彼の原像を取りもどすた

めの試みがこの一文の執筆動機だ。

ニーチェの著作をむずかしい哲学書と決めつけるのは，ニーチェへの素直なアプローチをさまたげる。逆にニーチェの言葉を，自分探しの簡便な入門書として，都合よく自分の身の丈にあわせて読むのはニーチェを歪めることになる。

ニーチェは20代後半からはじまった体調不良と，病の克服過程で自分にふさわしい書き方をした。かれの著作には，物事の真実をえぐりだすような断片的，警句的な文章があり，一瞬のひらめきと直観に身をゆだねて言葉を書きつらねた文章もある。

ここで多く引用することになるニーチェ中期の代表作『ツァラトゥストラ』は，超人思想，永劫回帰を中核とした哲学書ではない。むしろ人間の健全な成長のための道しるべ，指針が語られている。私には病気で退職せざるをえなかったバーゼル大学の学生たちを意識して語っているような記述であるような感じがする。ストレートに教訓が述べられるときもあるが，多くはゆったりと説きおこされた比喩的な語り口が中心だ。この比喩が多くの読者のつまずきの石になり，ニーチェを謎めいた不可解な哲学者として敬遠させることもある。そのため，それならいっそニーチェの他の理解できそうな短い言葉だけ読んで理解しようとするか，あるいは手ごろな解説書だけ読んでニーチェをわかったような気になってしまう。

ニーチェの哲学用語というなら，むしろ『悲劇の誕生』から初期の作品内に，ショーペンハウアーからの援用，たとえば「存在の根拠の原理」のような言葉が多く散見される。しかしその後の『人間的な，あまりに人間的な』，『曙光』，『悦ばしき知識』では，難解な哲学用語をさけたアフォリズム形式の文体が中心となってくる。そして『ツァラトゥストラ』へ。その後の『善悪の彼岸』，『道徳の系譜』は『ツァラトゥストラ』の比喩的な説論を多少理論的に説明しようという意図で書かれ，さらに晩年から狂気にいたる作品では，アフォリズムをちりばめた精神的に高揚した，攻撃的で激烈な言葉の世界がくり広げられる。

私がニーチェの作品にはじめてふれた1960年代後半の日本は，大学紛争がおき，左翼系学生が大学の自治をもとめ，さらに反政府活動を行っていた。この時期，左翼系の思想とともに「実存主義哲学」が流行し，サルトル，ニーチェ，キルケゴール，カミュなどの思想家の作品が読まれるようになった。おりしも中央公論の『世界の名著』シリーズも刊行されはじめた。思想書が中心だったが，初回配本は『ニーチェ』だった（初版は1966年）。ここに翻訳，収録された二つの作品は『悲劇の誕生』と『ツァラトゥストラ』だった。しかもこの巻には「ニーチェと現代」という三島由紀夫と訳者手塚富雄の対談が付録の形でおさめられていた。いま思いかえしてみると，この本の出版はこの時代の雰囲気を象徴するような出来事だったかもしれない。64年に東京オリンピックがあり，日本の高度経済成長路線を背景にして，日米安保騒動の余韻を引きずりつつ大学紛争がおこり，実存主義哲学が注目された。この初回配本『ニーチェ』の二作品は，読みようによってはこの時期の日本の精神動向に一石を投じるようなインパクトがあった。揺れうごく社会の動きに目をうばわれず，しっかりと自己の生き方を見定めるようにうながしていた。それはこの二人の対談の言葉のやりとりのなかにある自由闊達な空気からも感じられた。しかしこのあと1970年に三島由紀夫は割腹自殺をとげた。当時大学生だった私には，その意味がまだはっきり自覚できないまま大きなショックをうけた。

こうしたなかで文芸評論家小林秀雄の『ニイチェ雑感』を読み，その歯切れのいい文章にある新鮮さをおぼえた。私もこの時期の雰囲気に飲みこまれていたので，小林独特の言葉のはこび方に取りこまれていたのかもしれない。この短いエッセイのなかに次のような文章がある。

> 病気はニイチェの全生涯に付き纏った。彼の様に，発想の根源を，いつも己の体験に求めたものの表現が，病気の影響なしにはすまぬ，特に，彼の著作の断片的な形式は病者を想わせる，そういう考えは，私の様なニイチェの愛読者には向かない。

いまこの小林秀雄に独特な文体のエッセイを読みかえしてみると，小林秀雄の歯切れのよさだけが目立ち，対象であるニーチェの姿が見えてこない。それは小林のような評論家は，ニーチェであれモーツァルトであれ，対象を語りながら，むしろ評論家自身を語るところに大きな特徴があったからかもしれない。私は以下の本文で，この文章とは逆の視点からニーチェ理解のポイントを語ってみたい。小林は引用文の最後で「そういう考えは，私の様なニイチェの愛読者には向かない」と言っておきながら，「彼の様に，発想の根源を，いつも己の体験に求めたものの表現」というようにニーチェの言葉の発想の基本はニーチェの「体験」だと認めている。この点を素直に見て，ニーチェの短い警句的な言いまわしにあまり目をうばわれないで，じっくり『ツァラトゥストラ』を中心とした作品を読みなおしてみたい[1)]。

ニーチェの作品をみていく際に重要なのは，まず彼の生活と生涯だ。よく知られた作品のタイトルをあげていくと，『悲劇の誕生』，『反時代的考察』，『人間的な，あまりに人間的な』，『曙光』，『悦ばしき知識』は初期の作品群ということになる。しかしこれから述べる私の分類の仕方では，はじめの二作品はまだニーチェが比較的健康にめぐまれていたときのもので，初期の作品群のなかにまとめて入れてしまうのにはややためらいがある。

いずれにしてもこの二作品とあとの三作品の間には，病でバーゼル大学の教授職をやめ，病気の療養に専念せざるをえなくなる大きな生活上の転機がある。正確には，『反時代的考察』を執筆しているときから，さまざまな体調不良を訴えている。

この時期に顕著になるニーチェの病については，これまでさまざまな原因が推測，憶測されてきた。後天的には進行性麻痺症。22 歳のときにジフィリス，つまり梅毒に感染したことにより，それが高じて狂気にいたっ

1）ニーチェからの引用はすべて次の文献から行う。Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden.* Walter de Gruyter. 1988.

たと診断する人もいる。また遺伝的には父親からきているという説もある。世界の名著の編者，手塚富雄は三島由紀夫との対談のなかで「遺伝的のものといえば，父親が階段から落ちて頭をうって，一年ほどたって死んだのですが，そのあいだ，やはり精神異常だったようです，最後の診断は脳軟化症ですが。ニーチェは少年のころから頭痛がしたり，目が悪かったりしている。だから遺伝的な要素がないとは言いきれない気もするわけですが」と語っている。

ともに確証的な断定はできない。それでもこれまでの研究者のなかには，後天的な梅毒感染と断定して，その病の進行と合わせて作品分析をすすめ，それによってニーチェの超人思想や永劫回帰の思想の由来を説明しようとする者もいる。こうした研究をつきつめていくと，ニーチェの著述内容と特色をすべてこの病気からおきたものと解釈することになる。私はかねがねこうした研究姿勢に疑問をもってきた。ニーチェの言葉の細部をこの病の進行と合わせてどこまで解釈していくことが可能なのか。そうならニーチェの言葉のもつ読者へのメッセージをかなり不当に狭め，貶(おとし)めることになるだろう。「超人」を説くニーチェの言葉は，ジフィリスに感染した病者の，狂気をふくんだ強がり，「永劫回帰」は病の苦痛を受けいれた開きなおりと諦めからくる言葉というように解釈するのだろうか。これは安易な研究姿勢になりかねない。

初期の作品のなかで，『人間的な，あまりに人間的な』，『曙光』では病の重さからまとまった長い文章が書けないため，短いきれぎれの警句が目立つ。書くことにより，ニーチェは自分を生につなぎとめようとする言葉を模索しているように思える。この病とその苦痛のためにかれは入院，治療していたわけではない。ほとんどひとりで，彼自身の言葉では「漂流者」のように，スイスや北イタリアで転地しながら病の癒しをもとめて生活していた。『悦ばしき知識』ではじょじょに病が癒え，快癒にむかっているような断片，ないしまとまりのある文章が出てくる。苦痛をしだいにつき抜けて，すがすがしい晴れやかな空間，地平に達しつつあるかのよう

な文章が多くなる。

そして中期の作品『ツァラトゥストラ』へ。いずれこの作品については詳述するが，いまはニーチェの病の進行と快癒の視点から話をつづけてみたい。『ツァラトゥストラ』後の二作品『善悪の彼岸』，『道徳の系譜』は，「すべての人のための本，誰にもわからない本」（『ツァラトゥストラ』の副題）を理論的に解説しようと試みた書物だ。『ツァラトゥストラ』は，ニーチェ全体の著作のなかでむしろ異色の作品といえるかもしれない。ゆったりとした比喩的語り口でツァラトゥストラの言動，人びととの対話，交際を物語風に描いているからだ。

このあと 1887 年から 88 年にかけての後期の作品に移る。1889 年 1 月，45 歳で発狂するまでの作品群『ヴァーグナーの場合』『反キリスト者（アンチクリスト）』『偶像の黄昏』などでは，おそらく良好な体調と精神の高揚とともにテンションが高まり，ヴァーグナーやキリスト教へのストレートな批判が多くなり，同じ言葉のくり返し，たたみかけが頻出している。発狂直前の作品『この人を見よ』でニーチェは，語るというより，むしろ歌っている，あるいは叫びに近い言葉を書きしるしている。そしてこの叫びのままに狂気の淵に沈んでしまった。私にはこの後期の作品には，精神の高揚，心身のテンションがエスカレートしていく様子とその異常なまでの迫力が感じられる。そしてそのままニーチェは異次元の世界へ旅立ってしまった。

以上述べてきたように，ニーチェの著作の特徴をまずは彼の「身体」の変化から見ておくことが大切だと思う。彼の生涯は病につきまとわれていたかもしれないが，いつも病者であったわけではない。「病者の光学」という彼の言葉は，病の体験をふまえた健康な者にだけ言える言葉だ。いわばかれの生涯にわたる「身体」のリズムが全体の著作のリズムを形づくっているように思われる。この心身の波動，律動のなかでニーチェの思想の変化，変遷もあらわれてくる。

このように見てくると，中期の作品群はニーチェ全体の作品の流れのな

かで，どちらかというとより論理的で冷徹な著作といえる。比喩をちりばめた，ゆったりとした語り口の『ツァラトゥストラ』。その後にじっくりと論述した『善悪の彼岸』，『道徳の系譜』がつづく。

1.「三様の変化」と超人

ツァラトゥストラという名前は，古代ペルシアのゾロアスター教の始祖ゾロアスターのドイツ語読みからきている。しかしこの書のツァラトゥストラの人物のイメージは，ガリラヤ湖畔で教えを説いて歩くイエスのイメージに近い。冒頭に「ツァラトゥストラが30歳になったとき，かれの故郷と湖を去り，山に入った。ここでかれは精神と孤独を味わい，10年間倦むことがなかった。しかしとうとうかれの心は変化し……」と記されている。山上で悟りを開いたので，その説教のために下山するのではなく，「私は思慮に飽きた。蜜を集めすぎたミツバチのように」市井（しせい）にもどるのだ，と語っている。

このあとツァラトゥストラはさまざまな人びとと交わり，対話，会話を行う。イエスのように奇蹟を行うわけではない。一方的に教えさとすのでなく，相手の言動を受けとめ，かれらを観察しながら自分の思いを吐露していく。

ツァラトゥストラが山をくだりはじめ，森のなかにはいったとき出会った老いた聖者との対話のあとで，「この聖者は，神が死んだことをまだ知らないのだ」とみずからにつぶやく。『ツァラトゥストラ』ではこのように冒頭から唐突に「神の死」が告げられる。そのあと近くの町にはいり，人びとが集まっているところに行ってつぎのように語りはじめる。

> 私はきみたちに超人を教えよう。人間は克服されるべき存在だ。そのためにきみたちはどんな努力をしてきたのか？　これまでのすべての生き物は，自分を超える何かを創造してきた。きみたちは大きな潮のなかの引き潮になろうとしている。それならいっそ動物に逆もどりし

たらいいだろうに。サルは人間にとって何だろう。哄笑と恥の的だ。同じように人間は超人にとって何だろう。サルと同じだ。きみたちは虫けらから人間になる道を作った。しかしきみたちのなかの多くの者はまだ虫けらのままだ。かつてきみたちはサルだった。今もまだきみたちはサルの域を出ていない。もっとも賢明な者でさえ，植物か幽霊かのどちらかか，あるいはどっちつかずのままだ。どちらになるべきか私が指示しようか？

このサルから人間をへて，超人を目ざす展開のなかに，当時出版されて間もないダーウィンの『種の起源』の影響があるとも言われている。ツァラトゥストラによれば，超人からみれば人間はサルのようなものなのだ。つづけてつぎのように語る。

私はきみたちに超人を教えよう。
超人は大地の意義だ。きみたちの意志は，大地の意義は超人だ！　と言っている。
きみたちにお願いする，大地に忠実になり，彼岸には希望があると説く者を信じてはならない。知ってか知らぬか，かれらは毒を盛る者なのだ。生きることを軽蔑する者，死にいく者，みずからが毒されている者だ。大地はこれらの者にうんざりしている。だからもう消えていってほしい！
かつて神への冒瀆は最悪のものだった。しかし神は死んだ。それと同時に冒瀆者もいなくなった。今や大地を冒瀆する者は，もっともおぞましい，知りようのない臓腑を大地の意義よりももっとありがたがる者なのだ。

有名な「神は死んだ」というニーチェの言葉は，何の理由づけもなされぬまま，このように突然語られるのだ。『ツァラトゥストラ』全編を読ん

でもその理由はほとんど語られていない。あたかも「神は死んだ」ことが既成事実であり，その前提の上でツァラトゥストラは語っているような印象をうける。その意味で『ツァラトゥストラ』のなかに「神が死んだ」理由づけを探しもとめる，あるいは必要以上にむずかしい理論づけをしようとしてもムダだ。

「神は死んだ」と言ったニーチェが，イエスの言動を彷彿とさせるような書き方はできないながらも，物語の雰囲気はまさに弟子をしたがえたイエスそのもののような印象をうける。しかしかれに弟子はいないが，弟子にたいして，若い大学生たちに説ききかせるような語り口をとっている。最後までひとりの「漂流者」のままの姿勢をつらぬいている。いずれ言及しなければならないが，ニーチェの「神は死んだ」という言葉は単なるキリスト教の否定ばかりでなく，宗教全般，ヨーロッパの形而上学，プラトンのイデアの世界の否定を意味している，とも言われる（ハイデッガー）。晩年の作品『反キリスト者』では，イエスその人のあからさまな非難，否定は書かれていないが，むしろキリスト教の成り立ち，新約聖書の教えがニーチェ独特のするどい心理分析によって批判されている。

いわば「神の殺害者」ニーチェは，ツァラトゥストラという人物を創りだし，超人を理想的人物，生き方としてかかげたといえる。第一部のはじめの章では「三様の変化について」語られている。「精神の三様の変化についてきみたちに語ろう。いかにして精神はまずラクダになり，ラクダはライオンになり，そして最後にライオンは子供になるかを。」このあとを読むとラクダは親，教師，社会の取り決めにおとなしく従う幼い者，親から見ればむすこやむすめの生き方の比喩といえる。この幼い者はしだいに成長し，親に反抗し，社会的しきたり，慣習に疑問をもちはじめる。「なんじなすべし」という絶対的命令から「われ欲す」という主体的言動をもちはじめるのが次のライオンの比喩だ。この段階で親に反抗し，これまでなんとなく従ってきた社会的慣習に疑問を投げかけながら「ライオン」は自分の生き方をさぐりはじめる。青年から成人への脱皮。「しかし兄弟た

ちよ，ライオンもできなかったことを子供ができるだろうか？　強奪するライオンが子供にならなければいけないのか？　子供は無垢であり，忘却であり，新しいはじまり，遊戯，みずから回る車輪，はじめての動き，神聖な肯定（ヤー）を発語する存在である。そうだ，創造の遊戯のためには聖なる肯定が必要だ。こうして精神は自分の意志をもち，世界を喪失した者は世界を取りもどす。」

人の一生をこのような三段階に分けるのは，やや大まかすぎる。とくにライオンから一気に「子供」に移るくだりは唐突で飛躍的すぎる。そして「無垢であり，忘却であり，新しいはじまり，遊戯，みずから回る車輪，はじめての動き」であるような子供の定義は，ドイツロマン派以来の「子供」の理想化からくる紋切り型の形容詞の羅列になっている。論語の「四十にして惑わず」に至るまで，青年は苦労し，さらに時間をかけて成長する。あるいはこの分類はいわゆるドイツ教養小説の成長過程の素描ないし粗描のようなものとして受けとめておいてよいかもしれない。

私にはこのライオンと「子供」のあいだに，ニーチェの超人への努力と生き方がさらに示されるべきで，このことを当時の時代批判とともに語り，説明している部分が『ツァラトゥストラ』の骨子をなしていると思われる。

ただ『ツァラトゥストラ』ののちの言説との関連において，「聖なる肯定」を行う点に注目しておきたい。つまりこの「肯定」，はツァラトゥストラが理想としてかかげる「超人」になるための必須の要素だからだ。人生で何度もくり返される不条理に耐え，肉体の苦痛をかみしめながら，不幸な偶然の突発事によるダメージを受けいれ，すべて最終的には自己の経験の糧として「肯定」するのが「超人」になる条件だ。すべての偶然は，自分にとってすべて必然だった，とふり返って言える境地に達した者が「超人」といえる。『ツァラトゥストラ』第三部「漂流者」に，「私に偶然になにかが起こるような時は過ぎ去った。これから私の身に起こることは，すでに私自身のものなのだ。ただ戻ってくるだけなのだ。最後は自分に帰ってくる，私の自己が。長いこと異郷にあり，あらゆるもの，偶然のなか

に散らばっていたこの自己が。」とある。これはニーチェの悟りの境地からでた意味深い言葉だ。さまざまな経験ののちに認識して語ることのできる言葉だ。こうした言葉がニーチェのアフォリズムの真骨頂だと思う。ただふつうここまでの認識は子供には起こらないが。

三様の変化の子供の説明からやや先にすすみすぎてしまったかもしれない。ただ，今引用した「漂流者」からの引用文には，実はニーチェの著作に頻出する「仮面」「永劫回帰」をふまえた深い認識も表現されている。このふたつもいわば「超人」になるための必須の条件，あるいは認識の通過点でもある。いずれにしても「漂流者」の章にはニーチェの思想のエッセンスが含まれている。ニーチェの長い体験から凝縮されたアフォリズムが。

『ツァラトゥストラ』冒頭の「三様の変化」のあと，「徳の講座について」「世界の背後を説く者について」とつづき，そのあと「身体の軽蔑者について」の章がくる。この第一部のはじめのところで「身体（あるいは肉体）の軽蔑者について」わざわざ取りあげている。「肉体の軽蔑者にわたしは言っておきたい。学びなおしたり，説教しなおしたりしないでいいから，自分の肉体に別れをつげてほしい ― つまり黙ってもらいたいのだ」と書きはじめたあとで，「感覚も精神も道具であり玩具だ。その裏に本物の自己がひかえている。自己は感覚の目でさがし，精神の耳で聴いている。いつも自己は耳をすませ，さがし求めている。比較し，強制し，獲得し，破壊する。自己は支配し，〈わたし〉の支配者になっている。きみの考え，感情のうしろに強力な命令者，未知の賢者がひかえている。それが自己である。自己はきみの身体のなかにある。身体は自己である。きみの身体のなかには，きみの最善の知恵のなかよりもっと多くの理性がある」と「きみ」に呼びかけている。長い，つらい病を克服したあとでニーチェが語るこうした言葉には説得力がある。べつに「肉体至上主義」をとなえているわけではない。精神を支える器（うつわ）である肉体，身体を精神と同じように育成せよと言っている。おそらくこの軽蔑者とは，神仏に奉仕する

ために肉体的欲望をおさえ，霊的生活に集中するように説く苦行僧のたぐいの人を念頭においているのかもしれない。肉体を酷使し，自虐に近いところまでいけば，反比例的に精神や霊が高められ浄化されるような錯覚にとらわれた者に警鐘をならしているともいえる。

ある意味で現代の身体論の先がけとなるような内容の章でもあるが，しかしこの章はあとで述べる「神は死んだ」というニーチェの重要な思想と密接に関連している。この「神」が「形而上学」「プラトニズム」「あの世」「彼岸」などを象徴しているだけでなく，まずはキリスト教の神を意味している。キリスト教ではこの世の生を終え，霊魂となってあの世での未来の生が約束される。このいわば精神的実態としての霊魂の重要性からみれば，「肉体」が軽視されるは当然である。この肉体を酷使し，欲望をおさえることで魂の純粋さを獲得し，「悪」に傾くのを防げることになるかもしれない。

こうした歴史的にも圧倒的な霊魂論があるなかにこの「肉体の軽蔑者について」の章をおいてみるならば，それだけでもインパクトの強さははかりしれない。「神は死んだ」という主張は，ニーチェのさまざまな思想に浸透しているが，この章はその一例といえるだろう。

ニーチェ初期の作品『悲劇の誕生』で，アポロ神にディオニュソス神を対峙させた。ディオニュソス神は酩酊と舞踏の神でもある。最晩年の著作のタイトルは『ディオニュソス頌歌』であったが，ディオニュソスは超人とは同列ではないのかもしれない。しかし一貫してニーチェはこのギリシア神を崇拝している。肉体の軽蔑者の対極にあるニーチェの身体論の見方からディオニュソスはどのように評価されるのだろうか。『悲劇の誕生』以来のディオニュソス像は，ニーチェの「病者の光学」にてらして理想像であり，病気がちだったニーチェの反面教師であったのかもしれない。ニーチェの肉体が病にせめさいなまれるあいだも，ディオニュソスのイメージはくり返し立ちあらわれ，彼のなかで生きつづけていたに違いない。しだいに健康を取りもどした晩年は，このディオニュソス的肉体がニーチェ

の精神を追いこしたための破綻の時だったのかもしれない。

2.「神は死んだ」

あまりにも有名になったニーチェのこの言葉は，近代の思想史の上でも大きく取り上げられ問題にされてきた。私が大学生だったころ，世界の大思想家としてマルクス，フロイト，ニーチェの三人がよくあげられていたように記憶している。どのような理由であれ，こうしたいわば通念は後世のあとづけのきまり文句であることが多い。そしてこれら思想家を積極的に評価しつつもマイナス面の評価もともなっている。ニーチェの場合，この言葉は西欧文明の基盤となるキリスト教を正面から批判し，神を否定して新しい価値基準を提案し創造する行為として大きく注目された。しかしその一方で神を否定することはニヒリズムの宣言であり，不敬なニヒリストとしてかれは強者は善，弱者は悪と決めつけるような誤解をうけやすい発言もした。プラトニズムやキリスト教を否定するきわめて危険な思想家とも見なされてきた。これらはまさしく後世の決めつけであり，総じて古典的作家，思想家という人物は原文が読まれないまま，後世の評論家，研究者たちのゆがんだ評価がそのまま拡大，拡散されることが多い。また今につづく後世の読者も原文を精読せず，安易な解説書を手にとり，それで原文を読んだ気になってきたせいでもある。

『ツァラトゥストラ』の前口上のなかで森の聖人との会話のあとで，みずからに「あの聖人は神が死んだことを知らないのだ」とつぶやいた。そのあとツァラトゥストラの言説にはいり「三様の変化」「徳の講座について」「世界の背後を説く者について」「身体の軽蔑者について」とつづく章を書く。このうちふたつの章についてはすでにふれた。「世界の背後を説く者について」はこんな風にはじまっている。

> かつてツァラトゥストラも自分の妄想を人間のかなたにある彼岸へとはせた。その点で世界の背後を説く者たちとかわらなかった。そし

てわかったのは，世界は苦悩し，せめさいなまれた神が創ったものだということだ。

神が創った世界，あるいは詩は神の夢想であるように思われる。不満をいだく神の目の前にあらわれた色とりどりのはかない煙だったのだ。

ここで世界の背後を説く者というのは，人間の背後に原理や神をもとめる宗教家，形而上学者のことだ。この点だけをとらえても「神は死んだ」という言葉がキリスト教の神だけを否定しているのではなく，もっと広い意味のことを暗示，象徴しているのがわかる。この章には『善悪の彼岸』，『反キリスト者』に通じるニーチェのキリスト教批判の基本的なポイントが比喩的な語りのなかにすべて出ているように思われる。

上に引用したような冒頭の言葉は，ニーチェの素直な告白ともとれる。この世の創造者の神は，自分の苦悩から目をそらすためにこの世を創り出したと言う。したがってこの世は神による「永遠に不完全で，矛盾をはらんだ模写，コピーの世界だ。不完全な創造者による酩酊気味の気ばらしの世界だ。私にはそんな風に思われた」と書いている。

苦悩と無能力　―　これが世界の背後を説くすべての者たちを作りだした。背後の世界は，もっとも苦悩にみちた者だけが知っている短いつかの間の幸せの幻想の世界だ。

これは一足飛びで究極のものに迫ろうとする疲労した者の世界だ。死のダイヴだ。あわれな無知の疲労であり，それ以上のものを意欲する気がなくなっている。これがすべての神々と背後の世界を説く者を作りあげた。

友よ，私の言うことを信じてほしい！　自分の肉体に絶望しているのは肉体なのだ。この肉体が，幻惑された精神の指先で究極の壁にふれたのだ。この肉体は大地にも絶望している。存在の核が自分に語り

かけてくるのを聞いているような気になっている。

［……］

しかし“あの世”は人間から巧妙に隠されている。“あの世”は非人間的で血のかよっていない世界，天上の無である。

衰弱し疲労した者が，つかの間夢想した「あの世」の天上の世界。ニーチェは「天上の無」の世界と言っている。みずからの肉体（身体）に失望し，大地に絶望した肉体は，「身体の軽蔑者について」の章で見たように，ニーチェの思想のなかで理性，精神より上位の重要な概念だ。肉体をしいたげ，それにより「魂」を純粋に昇華していくような愚かな考えをすて，健康な身体の声に耳をかたむけよ，と説いている。

神のいない世界でニーチェが選択し決断していく生き方が『ツァラトゥストラ』のなかに書きしるされ，神にかわる理想的生き方を体現した者としてニーチェは超人をかかげた。『ツァラトゥストラ』はこの超人を多角的に描きだそうとしている。まずは「神は死んだ」と宣言し，その上で潔く個としての自己の生を受けとめ，「漂流者」としての道を歩む。この間，実際のニーチェは常人よりは重い病をかかえ，何年もかけて克服し，快復をまった。

ここまでの説明だけでも超人であるための条件がじょじょに明らかになってきたと思う。たえざる克己，自己克服の長い道がまっている。超人になるための必須の条件をさらに詳述してみたい。

3．仮面

バーゼル大学退職後に知りあった女性ルー・サロメ。彼女は思想家，哲学者であり，リルケとも親交をむすび，すぐれたニーチェ論（1894 年）を書いた。ニーチェの友人パウル・レーとともに，ルーとレーとの三角関係と噂されるようなつきあいをしたこともある。ニーチェが発狂した翌年に「フリードリヒ・ニーチェの肖像のために」という短いエッセイを書い

ている。

> 私があの人のことを思い出す折に，目の前に浮かびますのは，あの人の最後の十年間の真中頃の姿です。申すまでもなくあの人の人相，全体的な外貌が，もっとも特徴を際立たせ浮彫りになって現れていた時期でした。［……］普段の生活において，あの人はこのうえなく礼儀正しく，当たりも柔らかで，他人に親切な，いつも変わらぬ，平常心を忘れない人柄でした。―　彼は交際という形式を愉しんでいましたし，重んじてもいました。けれども，いつもそこには仮装に対する歓びがあったようです。―　内面生活を赤裸々に剥き出しにしないための外装と仮面とがあったのです。　（西尾幹二訳）[2)]

病と闘いながら超人思想をつくりあげつつあったニーチェは，まわりの友人たちのひとりルー・サロメからこのように見られていたのだ。超人でも凡人でもなく，ひたすら静かに目立たぬ存在であろうとしたニーチェ。それだからこそ「仮面」や「演技」について，たくさんのするどい洞察の言葉を残せたのかもしれない。

『ツァラトゥストラ』第二部，「人生の知恵について」から。

> 私の意志は人間に結びつけられている。私は鎖で自分を人間につなぎとめている。なぜならそうしないと私は超人へと引きあげられてしまう。私のもう一方の意志は超人を目ざしているからだ。そのために私は人間たちのあいだでは盲目に生きている。あたかも私が人間を知らないかのように。私の手が堅固なものへの信頼をすべて失ってしまわないように。私はおまえたち人間を知らない。この闇であり慰めである人間は私のまわりにひろがっている。［……］用心しないでいるという摂理が私の運命をおおっている。

2）『西尾幹二全集　第五巻』国書刊行会、平成 23 年所収。

> 人間たちのなかにいてやつれ果ててしまいたくない者は，どんなグラスからも飲めるように学習しなければならない。人間のなかにあって純粋でありつづけたい者は，汚れた水でも体を洗えるようにしなければならない。

とても謙虚で思慮深い，静かな生き方。ここに大げさな言葉はひとつもない。しかし実にユニークな処世術かもしれない。「よく隠れて生きる者はよく生きる」という哲学者デカルトの言葉が思いおこされる。目立たずにひたすら自分の生を生きること。これは消極的でマイナス思考の生活態度とはちがう。これがまさしく超人の素顔であり，超人の条件でもある。

しかしここには日常生活で超人思想をいだいている矜持もうかがえる。それは「この闇であり慰めである人間」「汚れた水でも体を洗えるように」という，いわば上から目線の表現のなかにもあらわれている。いや，『ツァラトゥストラ』全編にはこの上から見おろしていることによる読者との距離感と余裕が感じられる。

『ツァラトゥストラ』後の著作である『善悪の彼岸』40 番から引用する。

> 沈黙するために語り，たえずコミュニケートを避けることが本能となっている，このような隠れて生きる人は，友人たちの心や頭のなかを自分の仮面がひとり歩きするがままにしておく。たとえそう望まなくても，自分の仮面はたえずあり，それはそれで仕方がないのだということがある日わかってくる。深い精神はすべて仮面を必要とする。いや，それ以上に深い精神のまわりにはたえず仮面が生じる。それはその人の言葉や立居ふるまいがつねに誤って，浅薄に解釈されるからだ。

ニーチェの仮面は偽装ではないし，いわゆる面従腹背でもない。普段の生活でさまざまな人と交わっていくなかで，おのずから生じてくる他者に

よるイメージ。その多くが本人の意思とは違うイメージであって，社会生活とはこの無意識のなかで作られてくるすれ違うイメージ，齟齬（そご）したイメージの交錯のなかでいとなまれ，成りたっているものかもしれない。

「深い精神はすべて仮面を必要とする」。この言葉はよく引用されるが，それにしても「沈黙するために語り，たえずコミュニケートを避けることが本能となっている，このような隠れて生きる人」という逆説を含んだ語りはニーチェ独自のものだ。くり返しておきたいが，これがまさしくニーチェのアフォリズムなのだ。私はあえて短い引用でなく，前後の文脈を紹介するようにしている。熟読，吟味してほしい。あとで引用するニーチェの言葉のなかにも，いつも超人が意識されている。ニーチェの言葉を短く切りとって，自分なりに都合よく解釈する前に，まず原文にそってニーチェを理解するようにしてほしい。

そしてこの仮面への洞察，社交生活のその場の空気にあわせて目立たない存在でいる必要性を説きながら，仮面の裏の本人はさまざまな経験をつみ重ね，認識し，苦悩し，成長していく。この仮面によって超人ニーチェは人生の如実の相を把握，吸収していった。この間ニーチェは長い病との闘いを経験しながら，最後はなにを感得したのだろうか。前章で第三部「漂流者」から引用した言葉，「私に偶然になにかが起こるような時は過ぎ去った。これから私の身に起こることは，すでに私自身のものなのだ。ただ戻ってくるだけなのだ。最後は自分に帰ってくる，私の自己が。長いこと異郷にあり，あらゆるもの，偶然のなかに散らばっていたこの自己が。」自己を長いこと仮面により異郷にあそばせ，他者に接近しつつ，思いがけぬ自己を発見し，体験を深化させていった向こうにおぼろげに見えてくるのが「私の自己」なのだろう。これは「自分探し」などという生易しい経験ではない。あるいは「自分探し」というものは，ニーチェの生涯のような経験ののちにじょじょにわかってくるものなのかもしれない。

この浮かびあがってきた「私の自己」を立ちどまってふり返ってみたとき，その道程はすべて必然の歩みだった。偶然に起きた不幸も，その時自

己に亀裂や苦悩をもたらしたかもしれない。しかし超人の条件である「自己をのりこえる」生き方によってそれさえも人生の必然に変えていくということだろう。

「漂流者」の後半でツァラトゥストラがみずからに語りかける言葉，「多くのものを見るためには，自分を度外視することを学ぶことが必要だ」。あるいは別の言い方をすれば，無私になってこそ，さまざまな体験を深めることができ，見えるものが見えてくるということだろう。「深い精神のまわりにはたえず仮面が生じる」という先のニーチェの言葉も，「自分を度外視すること」のできる者だけが味わう経験だ。

4. 永劫回帰

第三部では先ほど引用した「漂流者」のつぎに「幻影と謎について」の章がつづく。『ツァラトゥストラ』の一部から三部までは 1883 年 2 月から 1884 年 1 月にかけて，それぞれ 10 日から 2 週間の短期間のうちに書かれている。私にはこの三部まではある程度の思想的な連続性があるように思われる。第四部はそれから 1 年後の 1885 年 2 月に書かれ，テーマや構想の上で，ニーチェは別の著作の端緒にしたかったようだ。

いずれにしても三部のこれらはじめの章では超人への生き方のエッセンスが表現されているように思われる。先に述べた「仮面」をもつことも超人になるための重要な条件だが，ここではいわゆる「永劫回帰」が謎めいた比喩で語られる。「幻影と謎について」はツァラトゥストラが船上の船員たちに，自分の見た幻影の謎解きをするように，疑問文を多用しつつ語りかけられる。

ツァラトゥストラが石ころのだらけの山道を登っていくと不思議な門を目にする。道づれの小人（＝侏儒）を意識しながらの語りだ。この門の上には〈瞬間〉と書かれている。

見よ，この瞬間を！　この〈瞬間〉という門から長い永遠の道がう

しろにつづいている。われわれのうしろには永遠がある。

　およそすべての歩くことのできるものは，一度はこの道を歩んだのではないか。すべてこれから起こることは，すでに一度起き，実行され，同じ道を通過してきたのではないか。

　すべてがすでにあったことなら，おまえはこの〈瞬間〉をどう思うか？　この門もすでにあったのではないか？

　このようにすべてはしっかりつながりあっているのだから，この〈瞬間〉はすべてこれから来るものをうしろに引きつれているのではないか。つまり自分自身をも？

　なぜなら，すべて歩くことのできるものは，この長い道から出て，さらに歩みつづけなければならないからだ！

　そしてこの月光のなかをゆっくり這うクモ，この月光，さらにこの門のところで永遠についてささやきあっている私とおまえ，―　われわれはみなすでに存在したことがあるのではないか。

　―　そしてふたたびやってくる，あの別の道をとおって。われわれの前にあるこの怖ろしい道をとおって。われわれはくり返し，永遠にやってくるのではないか。

　こう私は語り，しだいに声を低めていった。なぜなら私は自分の考え，深い考えが怖ろしくなったからだ。するととつぜん近くで犬の遠ぼえが聞こえた。

　こうした犬の遠ぼえをむかしも聞いたのではないか。思いは過去へとさかのぼった。そうだ，子供のころのことだった

これまでのニーチェ研究において，認識論や時間論の上から，この〈瞬間〉の話を起点としてさまざまな論が展開されてきた。キリスト教の終末論，侏儒が主張する時の円環論などがそうだ。しかしここでの〈瞬間〉を起点として前後に永遠にのびる直線的時間の比喩をやはり素直に受けとり考えてみたらどうだろうか。過去と未来の接点である瞬間から，未来に向

かって永遠にのびるだけでなく，過去に向かっても道がのびているとツァラトゥストラは言う。しかも「この〈瞬間〉はすべてこれからくるものをうしろに引きつれているのではないか。つまり自分自身をも？」過去からの連続体としての自己，そしてこの自己は生をつづけることで未来につながっていく。それはいわば自明のことではある。連続体としての意識は薄いかもしれないし，自分自身を引きつれてくる感覚も強くないかもしれない。過去と未来の接点としての現在の〈瞬間〉は，むしろ混沌としているのかもしれない。そして未来につながっていく道の向こうにはなにがあるのだろう。直線でなく円環であれば，いずれどこかで回帰し円がとじられるのかもしれない。

しかし「そしてふたたびやってくる，あの別の道をとおって。われわれの前にあるこの怖ろしい道をとおって。われわれはくり返し，永遠にやってくるのではないか。」という言葉には何か過去から未来へ，同じ人間としての自己と生活のいとなみがいつまでも果てしなくつづいていくような徒労感，あるいはある虚(むな)しさがただよっている。「およそすべての歩くことのできるものは，一度はこの道を歩んだのではないか」。いずれにしても自分自身を引きつれて，同じ過去が未来へつながっていくのなら，これから何をしても結局同じことになるのではないか。自己の成長や成熟はあるのだろうか。過去とほぼ同じことをして，そしていずれは死んでいくのではないか。こうした想いはこの〈瞬間〉の門にたたずむ者には，深い絶望の淵においやられるような，そしてそこからの逃げ道がないような認識にいたる。こうした認識に日常生活でとらわれたならどう感じるだろうか。これから未来に向かって生きていく支えにはなりそうもない認識だ。この「幻影と謎について」からの引用文の前にはつぎのような言葉が書かれている。

> 勇気はまた，深淵をのぞきこんだときのめまいをも打ち殺す。それにしても人間はいたるところで深淵に臨んでいるのではなかろうか！

見ること自体が，―　深淵を見ることではないのか？［……］勇気にまさる殺し屋はいない。すすんで攻める勇気。それは死をも打ち殺す。なぜなら勇気はこう言うからだ。〈これが生きるということであったのか？　よし！　もう一度！〉

こうした同じくり返しの人生でも，それを自覚したうえであえて肯定し，生きつづけるのは容易ではない。しかしこれが永遠回帰の想いをふまえた上でのニーチェの生の肯定なのだろう。もちろん別にむずかしい認識をせず，ただなんとなく楽しく生きるのも選択肢のなかに入ってくる。私は大学生のときニーチェをはじめて読み，ツァラトゥストラの「見ること自体が，―　深淵を見ることではないのか？」という言葉にひどく共感した。マイナス思考とか虚無感などという弱々しい感情ではなく，むしろ積極的な力づよさを感じた。「勇気にまさる殺し屋はいない。すすんで攻める勇気。それは死をも打ち殺す」。別の言い方をすれば，自分をはげますように語っているニーチェは，これほどまでに絶望している人間なのだ。何に絶望し，どのような深淵を見るかは個人によってちがう。『ツァラトゥストラ』にくり返しでてくる「没落せよ」という言葉の感覚は，この絶望や深淵に臨んだときの体験からもきているのではないか。ニーチェは深淵になんども落ちて，そのつど浮上してきた。そのときどきになにかを自覚したからではなく，生きようとする意志がそこにおのずからはたらいていたのではないか。まえがきで言及した小林秀雄の『ニイチェ雑感』には「どうしても生きようとするものが自分の裡にある，其処が彼の考えによれば，哲学的真理の棲む場所であった」と書かれている。これはいわば生の炉心であり，言葉による論理的説明が拒まれた地平だ。

こうした最低点での生を，そのまま引きずって永遠に歩みつづけるのではないか。永遠にくり返していくのだろうか。こうした思いにとりつかれた人間の気持が，はじめの引用のなかににじみ出ている。さらに歩きつづけていくツァラトゥストラの前に異様なすさまじい光景が現れる。ヘビを

飲みこんでのたうちまわっている羊飼いがいた。

私がじっさいそこで目にしたのは，これまで一度も見たことのない光景だった。ひとりの羊飼いが顔をゆがめ，痙攣（けいれん）をおこし，のたうちまわっているのを見た。かれの口からは黒い，重いヘビがたれさがっていた。

ひとりの人間の顔に，これほどの嘔吐と青ざめた恐怖を見たことがあっただろうか。かれは眠っていたのだろうか。そして口もとからヘビがはいりこんだ。そして嚙みついたのだ。

私の手でヘビを引っぱり出そうとした。ダメだった。どうしても口からはなれない。そこで大きな声でさけんだ。「嚙みつけ！　嚙みきれ！　ヘビの頭を嚙みきってしまえ！」と，そう私の恐怖，憎悪，嘔吐，同情心は叫んだ。善意も悪意もこめて，大声で叫んだ。

きみたち，大胆な者よ！　きみたち探究者，誘惑者よ！　狡猾に帆をあやつり未知の大海へとこぎ出してゆく者たちよ！　ナゾを喜ぶ者たちよ！

きみたち私があのとき見たナゾを解いてくれ。あのひとりのたうち回る男の幻影を説明してくれ！

なぜならあれは幻影であり，未来の予見だからだ。あのとき私はなんの比喩を見たのだろうか。いずれ来るにちがいない，あの男はだれなのだろう？

あの羊飼いはだれなのか。ヘビが口からはいりこんだ男は。もっとも重い，もっとも黒いものが口からはいりこむような人間はなに者なのだろう？

―　しかしこの羊飼いは私が叫んだとおりに嚙んだ。しっかりと嚙みきった！　そしてヘビの頭を遠くへ吐きだして，さっと立ちあがった。

もはや羊飼いではなかった，人間ではなかった。変容し，光につつ

まれた者だった。かれは笑っていた！　この世でこのように哄笑した者はいまだかつていなかった！

他人の手をかりずに，みずからヘビを噛みきったこの変容した者が超人ニーチェであることは説明するまでもないであろう。口からはいりこんだヘビは，永遠にやってくるかもしれない虚無の連鎖，瞬間の門にたたずんで未来に目を向けていても既視感におそわれ，「われわれはみなすでに存在したこと」をくり返しているだけではないのかという思いが凝縮したものの比喩だ。この口のなかのヘビを噛みきって，連鎖を断ちきる勇気をふるい起こせと言っているのだと思う。この事実を受けいれ，この永劫回帰の生を肯定するのが，晩年にいたるまでのニーチェの基本的主張だった。

このようにかれの言う永劫回帰とは，具体的な自分の経験とその反省から生まれ発展してきた想いをもとにしている。いわばこの原体験は理論的に述べるより，比喩によって語ることによりはじめていきいきしたイメージをもって読者に訴えかけてくるのだろう。ニーチェの言葉を使えば，一旦絶望し，「没落」して，そこから自己克服し，困難をのりこえて生きつづけるのが超人の条件なのだ。『ツァラトゥストラ』はむずかしい哲学用語を駆使した書物というより，随所にこのように豊かな文学的イメージが散りばめられた言語芸術作品といえるだろう。